

《報告》

第9回アジア太平洋タバコ対策会議報告 「アジア太平洋におけるFCTC：変化、挑戦、前進」

宮崎恭一

NPO 法人日本禁煙学会 理事／全国禁煙推進協議会 事務局長
第10回APACT会議事務局長(2013年)

はじめに

1989年に第1回APACT会議が台湾の台北市で開催されて以来、3年ごとに開催され、第2回は韓国のソウル、第3回が日本の埼玉県大宮(1993年)、第4回タイのチェンマイ、第5回香港、第6回フィリピンのスービック、第7回韓国の慶州、第8回は台湾で18周年の特別会議が開催されました。この会議は健康財団董基金(台湾)がスポンサーとなり、アジアの諸国をアメリカの国際タバコ産業の攻勢から守ろうというのがきっかけで始まりました。しかし現在はアメリカ、イギリス、日本のタバコ産業からアジアや太平洋の国々をタバコの害から守るという趣旨に広がっていきました。

今回初めてアジアから離れてオーストラリアのシドニーで第9回会議が10月6日～9日まで開催されました。次回第10回アジア太平洋会議を幕張メッセで行うことになった関係で、大会長である島尾忠男先生(たばこと健康問題NGO協議会会長、結核予防会顧問、エイズ財団会長)、作田学副大会長(日本禁煙学会理事長)、大島明副大会長(日本禁煙推進医師歯科医師連盟会長)に実際の会議の様子や規模、またどのように運営されているかなどを見ていただくことに重点を置いた、いわば視察参加ということになりました。

シドニーの気候はちょうど春先で、良い天候に恵まれ、心地よい浜風とオペラハウス、ハーバーブリッジの景観を楽しみながら、近くにあるシドニーコンベンション展示センターにて開催されました。

APACT理事会

開会式の前日、APACT理事会がもたれ、台湾・董基金の方々、名誉事務局長のテッド・チェン博士、ジュディス・マックイ博士、ダニエル・タン博士(フィリピン大会長)、ブンオン(タイ大会事

務局長)、イル・スン・キム博士(韓国大会会長)らが集まり、第9回APACT会議の概要説明が、大会長である、ハーレイ・スタントン博士によってなされました。

登録参加者は約700名で、41カ国から集まりました。台湾から100名、中国から50名、日本から40名、タイから30名ということでアジア勢が多く参加したことになります。オーストラリアからは140名とのことで、もう少し多く参加することを期待していたようです。学術委員長のロン・ポーランド教授(ビクトリア州がん協会)によると、アブストラクト(抄録)は830題に上り、かつてない盛会となりました。アブストラクトは学術委員会(査読委員会)によって選考され40題ほど却下されたようですが、結局600題が主な発表対象となりました。

この理事会で、島尾先生が日本での開催を発表し、歓迎のスピーチをして、森田健作知事(千葉県)のビデオメッセージを放映しました。また第11回の会議は2016年北京での開催を中国が申し入れている旨がアナウンスされましたが、マレーシアも立候補する予定とのことです。

ウエルカムレセプション

10月6日の夜はレセプションが開催され、ワインやドリンクが用意され、軽いおつまみで立食パーティーでした。スタントン博士は、挨拶の中で、日本から来た高校生の大石悠太君を紹介し、拍手をあげました。大石君は9歳のとき自分の喘息はタバコの煙が原因であることを突き止め、静岡市議会に受動喫煙防止を呼び掛け、3年後に市内は受動喫煙防止対策が始まったというのです。スタントン博士はそれを聞いて、WHO本部に報告し、大石君がWHOから表彰されたのです。そのよう

な関係で、母上と初めてシドニーを訪問し、学会に参加したのです。英語も一生懸命練習してきたことですが、時々通訳が必要で、お助けしました。テレビ、新聞などの取材も多くありました。現在高校3年生ですが、将来、ハワイのREALグループらと提携して、日本禁煙学会の中にタバコ対策青年部を立ち上げるとのことです。

本会議は幻想的に始まる

オープニングセレモニーにおいてアボリジニのダンスや音楽で始まりました。ユーカリの葉をいぶして煙で清め、動物のまねをした踊りは幻想的な雰囲気を醸し出しました。続いて大会長のハーレイ・スタントン博士が歓迎の言葉と、多くの国々からタバコ対策のために集まったことを発表しました。ニューサウスウェールズ州の知事であるマリエ・バシャー教授の挨拶があり、特別講演はアセアン(東南アジア諸国連合)事務総長のピツワン博士(タイ)で、タバコに侵食されないアジアを作るという力強い演説でした。

続いてのプレナリーセッションでは、WHOタバコ規制枠組み条約(FCTC)の事務局長であるハイク・ニコゴシアン博士やインドのショーバ・ジョンFCA議長、プラキット・バテサトグキット教授(タイ)、そしてターニア・アミール弁護士(パングラディッシュ)により、アジア太平洋地区におけるFCTCの展望についてパネル討議が行われました。そのあと4か所にわかれて、シンポジウムや口演が行われました。10時と3時にはコーヒーブレイクがあり、昼食はサンドイッチと温かい料理が用意されました。昼食時やおやつタイムを利用して、ポスターセッションが開催され、自由に発表を見ることができました。

全体の発表としてはタバコのパッケージに写真や絵を入れた警告表示が有意義であるといったテーマが多かったように思われました。日本からは作田理事長はじめ栗岡理事、菌理事、繁田評議員、加藤正隆評議員、来馬評議員、天貝先生らのポスターが並び圧巻でした。また口演も中村先生、大和先生もあり、今までの最高参加人数40名のため会場を行ったり来たりが大変でした。

ブースの店番

山下武子さん(結核予防会顧問)、鈴木千宏さ

図1 シドニー空港免税店のタバコ売り場



ん(ICS=コンベンション担当)、私の3人で交替して、次のアピールのためAPACT2013ブースの店番をしました。もちろん島尾先生、作田先生、他の日本からの参加者のたまり場になったことは確かです。千葉国際コンベンションビューローのご尽力で用意されたパンフレットやお土産を参加者に配りました。シドニーのJNTO(日本政府観光局)が用意してくださった、風のミニチュアや折り紙コースターなどに人気が集まり、パンフレットを渡すよりも忙しい状態でした。

オーストラリアのタバコ事情

オーストラリアではタバコの値段が2010年4月から12ドル(約1,000円)になり、2年後にはパッケージからロゴをなくすという条例も踏まえて、タバコを吸わない環境に限りなく近づいているように思われました。ホテルはもちろん、すべての建物内は禁煙となって、レストランも快適でした。が、しかし、路上には灰皿が設置され、歩きタバコは日本よりひどい状況であったのは残念です。吸いながらも路上に捨ててあり、まだまだ改善の余地があるように思われました。しかし空港内の免税品店では、タバコが直接通りから見えないようにボードで区分されていました。

夕食は近くのレストランで仲間を誘って食事をし、禁煙の素晴らしさを実感したものです。少々値段は高めでしたが、料理もおいしく、大満足の旅となりました。ある方々は昼間、学会をぬけだして町の中心部を散策したり、丸一日遠出としゃれた方もおられたようです。

金曜日の夜は

オブションでハーバートワイライトクルーズがもうけられ、参加してみました。しゃれた船に乗り込み200名ぐらいが日没から夜景を楽しみました。船上は肌寒いくらいで、しばらくするとシドニー大学の教授である、サイモン・チャップマン博士ひきいるバンドが演奏を始め、1960年代、70年代のロックを披露してくれました。なんと2時間のライブで、途中から踊りになり、日本勢も大乗りでした。

閉会式

あっという間の4日間でしたが、閉会式となり、本大会長スタントン博士から島尾先生に次期

APACT会長のメダルを渡す儀式がありました。島尾先生はスピーチの中で、日本で開催された1987年の「第6回タバコか健康か世界会議」を手伝う機会が与えられたり、1993年の第3回APACT会議にも主要な役割を持ったことなど、不思議な縁という話題を披露し、次回20年ぶりの日本での再開をアピールした格調高い演説で締めくくりました。

いよいよ日本の番がきたという強い思いでシドニー空港を出発し、9時間のフライトの後無事成田に着くことができました。

次回のAPACT会議の開催の準備のための参加として、日本禁煙学会の支援をいただきましたことを謹んで御礼申し上げます。

以上